

恋愛の壁、結婚の壁

－ ソーシャル・キャピタルの役割 －

小林 盾

【要旨】

この論文では、人びとが恋愛をどのようにはじめて、それを結婚にどう結びつけているのかを、ソーシャル・キャピタルの視点から検討する。そうした恋愛の壁と結婚の壁における社会的格差を分析することで、家族形成プロセスを解明し、少子化防止にどのような支援が必要かをかんがえる。そこで、ランダムサンプリング調査によって恋愛経験を計量的に測定した。その結果、恋愛の壁をこえて恋人と交際するのに教育や職業といった社会階層は影響をもたず、恋愛はすべての人に平等にひらかれていた。それよりむしろ、成人前の友人関係、部活動、恋人といったソーシャル・キャピタルがその後の交際人数を増加させた。さらに、交際人数が多ければ、とりわけ1人とでも付きあったことがあれば、結婚の壁を乗り越えるチャンスがふえた。これらの結果は、ソーシャル・キャピタルを蓄積することが、恋愛経験や家族形成に役だつことを示唆する。

【キーワード】

恋愛、結婚、格差、ソーシャル・キャピタル、社会階層

1 目的と仮説

日本社会はかつて、ほぼすべての人が一度は結婚する「皆婚社会」であった。ところが、1980年代から未婚者がふえはじめ、2010年には男性の生涯未婚率（50歳時未婚率）が19.4%、女性9.8%へと上昇して未婚化がすすんだ（図1、社会保障・人口問題研究所人口統計資料より）。同じ時期に少子化が進行し、合計特殊出生率（1人の女性の平均出産数）が1925年に5.1だったのが、1950年3.7、2010年1.4へと低下している（厚生労働省人口動態統計より）。

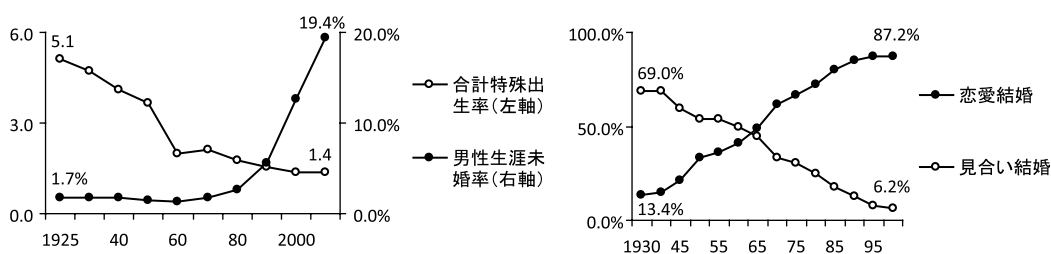


図1 合計特殊出生率、男性生涯未婚率、結婚形態の推移

いっぽう、結婚形態はかつて見合いが中心だったが、1960年代後半に恋愛結婚が上回った。現在では2005年で見合い結婚6.2%にたいして恋愛結婚87.2%となり、恋愛結婚化がすすんだ(社会保障・人口問題研究所出生動向基本調査より)。その結果、山田・白河(2008)、山田(2010)によれば、結婚が自然にできる時代はおわり、現代は結婚するために積極的な活動が必要な「婚活時代」になったという。

つまり、ここ数十年で恋愛結婚化、未婚化、少子化が同時に進行した。そのため、いわば恋愛を開始する際の「恋愛の壁」、恋愛から結婚への「結婚の壁」、結婚から出産への「出産の壁」が出現し、どれも乗り越えた人だけが子どもをもつことができたといえる。

では、こうした壁はすべての人に平等に立ちはだかるのだろうか。それともある階層の人には壁が低く、別の階層には高いのだろうか。もしこのことを解明できないと、ともすれば家族形成を通して階層格差が再生産され、拡大しかねない。そこでこの論文では、「恋愛の開始」と「恋愛から結婚への移行」に焦点をあてて、恋愛の壁と結婚の壁における社会的格差をしらべる。

では、人びとはどのような恋愛経験をして、それがどのように結婚に結びつくのだろうか。谷本(2008)は雑誌記事をもちいて、若年層の恋愛行動を分析した。内閣府(2011)はインターネット調査データによって、若年層の恋愛行動と結婚プロセスを明らかにした。ただし、どちらも事例研究であるため、ともすれば全体像を見逃してしまいかねない。そのため、ランダムサンプリングによってデータを収集する必要がある。

恋愛の壁は、教育、職業などの社会階層が高いと、さまざまな資源を保有するため、こえやすいと予想できる。また、成人前に異性・同性とふかく関わり、その経験がソーシャル・キャピタルとしてコミュニケーション能力を向上させて、恋愛経験に役だつだろう。結婚の壁は、現在では9割ちかくが恋愛結婚なので、多くの恋愛を経験するほど乗り越えやすいとかがえられる。そこで、以下の仮説を検討する。

仮説1(恋愛の壁について)：社会階層が高い人ほど、また成人前のソーシャル・キャピタルが多い人ほど、交際人数が多いだろう。

仮説2(結婚の壁について)：交際人数が多い人ほど、結婚しやすいだろう。

2 データ

データとして、2010年社会階層とライフスタイルについての西東京市民調査を用いる。これはランダムサンプリングにもとづく郵送調査である。母集団は東京都西東京市在住35～60歳男性で、計画標本1200人、有効回収数760人(有効回収率64.0%)であった。

この調査ではじめて、恋愛行動がランダムサンプリングによって測定された。ただし、調査対象は男性に限定されている。恋愛行動について、以下の質問で測定した(10人以上は分析のときまとめた)。アで告白した人数、イで告白された人数、ウで交際人数をきいた。

表1 記述統計

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	相関係数		
						交際人数	告白した人数	告白された人数
交際人数	641	0	10	3.58	2.49			
告白した人数	641	0	10	3.27	2.48	.489***		
告白された人数	641	0	10	3.14	2.75	.525***	.361***	
既婚ダミー	641	0	1	.80	.40	.124**	.077	.113**

*** $p < .001$, ** $p < .01$

問14 あなたにはこれまで、以下のような人が何人くらいいましたか

ア) 自分から恋愛感情を告白した	<input type="text"/>	人くらい
イ) 自分に恋愛感情を告白した	<input type="text"/>	人くらい
ウ) 付き合った	<input type="text"/>	人くらい

以下の分析では、配偶者との離別者・死別者をのぞいて、すべての属性と恋愛行動について回答した641人を対象とする。標本は平均年齢45.9歳、教育別では中高卒36.5%、短大・高専卒2.8%、大卒・院卒60.7%、婚姻状態別では既婚者80.2%、未婚者19.8%、従業上の地位別では自営業主・自由業主・家族従業員・内職14.5%、正社員・公務員72.5%、派遣・契約・嘱託社員4.2%、パート・アルバイト・臨時雇用3.1%、その他0.6%、無職5.0%、有職者のうち職業別では専門職20.0%、管理職32.9%、事務職15.3%、販売職11.2%、熟練職10.7%、半熟練職6.0%、非熟練職3.8%、農業0.2%、平均世帯年収727.0万円であった。

成人前の同性とのソーシャル・キャピタルとして、小中学時代に友人と野球・サッカー、虫とり、フナ釣り、秘密基地づくりをそれぞれしたかと、中学で部活動をしたかを指標とした。異性とのソーシャル・キャピタルとして、中学と高校でそれぞれ恋人がいたかを質問した。

3 記述統計

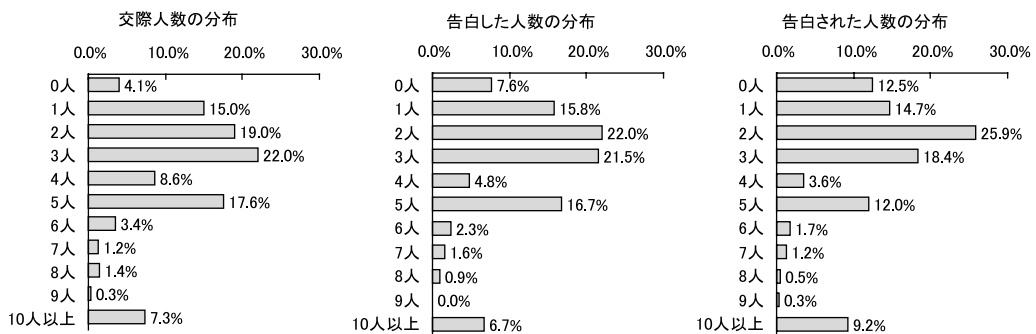


図2 恋愛経験の分布 (すべてN=641)

恋愛経験については、平均3.6人と交際したことがあった。3.3人に告白したことがあり、3.1人から告白された（表1、図2）。この3変数は、たがいにつよく相関していた。既婚者かどうかとは、交際人数と告白された人数が有意に関連していたが、告白した人数とは関連がなかった。

成人前のソーシャル・キャピタルについては、小中学時代に野球・サッカーをした人が87.3%、虫とり82.9%、フナ釣り36.1%、秘密基地づくり67.2%いた。分析ではこの4変数について、それぞれ経験ありを1、なしを0として合計したものを「小中友人経験」としてもちいる（範囲0～4、平均2.7、標準偏差1.0）。中学で部活動をした人は85.1%いた。中学のとき恋人がいた人は23.9%、高校のとき34.6%だった。

平均交際人数がグループごとに異なるかをしらべるために、交際人数を従属変数として分散分析をおこなった（グループ別の平均交際人数と既婚者比率は表3、図3）。その結果、婚姻状態、職業、小中友人経験、中学部活動、中学・高校での恋人有無によって、有意に平均が異なっていた。したがって、既婚者ほど、半熟練職ほど、小中で友人とよく遊んだ人ほど、中学で部活動をした人ほど、中高で恋人がいた人ほど、多くの人と交際していた。年齢、教育、従業上の地位、世帯収入では違いがなかった。

いっぽう、既婚者比率を従属変数とした分散分析をおこなった結果、年齢、教育、従業上の地位、職業、世帯収入、高校での恋人の有無によって、有意に比率が違った。つまり、年配者ほど、教育が高い人ほど、自営業者や正社員ほど、専門職や管理職ほど、収入が多い人ほど、高校で恋人がいた人ほど、有意に結婚していた。分散分析で有意となった独立変数は、交際人数と既婚者比率でおおむね排反していた。

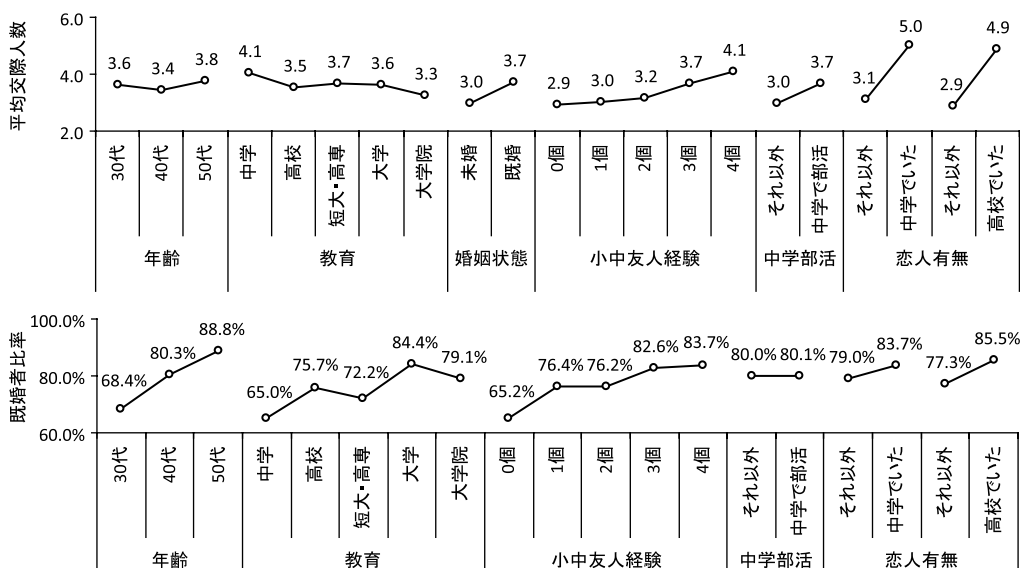


図3 グループ別の平均交際人数、既婚者比率

表2 分析結果

	従属変数				
	交際人数 (回帰分析)			既婚ダミー (ロジスティック回帰分析)	
	モデル1	2	3	1	2
年齢	.027	.046	.089*	.086***	.085***
社会階層					
教育年数	-.018	-.016	.013	.136**	.137**
初職ホワイト カラーダミー	-.008	-.009	.020	-.038	-.035
同性とのソーシャ ル・キャピタル					
小中友人経験		.151***	.094*		
中学部活ダミー		.105**	.060 †		
異性とのソーシャ ル・キャピタル					
中学恋人ダミー			.176***		
高校恋人ダミー			.282***		
交際人数					0.144**
決定係数	.001	.035	.185		
-2対数尤度				599.7	587.6
標本サイズ	634	634	634	641	641

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ 。回帰分析の値は標準化係数

4 分析結果

仮説1「社会階層が高い人ほど、また成人前のソーシャル・キャピタルが多い人ほど、交際人数が多いだろう」を検証するために、交際人数を従属変数とした回帰分析をおこなった(表2)。このとき、交際人数はこれまでの累積なので、現在の情報を独立変数とはできない。そこで、職業には現職ではなく初職の情報を持ちいて、初職が専門職・管理職・事務職のホワイトカラーだったかどうかと、初職の職業威信スコアを独立変数とした(職業威信については都築 1998 参照)。現在の収入は独立変数からのぞいた。

その結果、モデル1から教育、職業といった社会階層は、交際人数に効果をもたないことがわかった。恋愛経験は、だれにとっても平等にひらかれているようである。

しかし、モデル2から小中学校時代に友人と遊んだ人ほど、また中学で部活動をした人ほど、交際人数が有意にふえた(運動部と文化部の違いはなかった)。モデル3から中学と高校で恋人がいた人も、同様に交際人数をふやした。標準化回帰係数の比較から、高校の恋人がもっとも影響がおおきく、つづいて中学の恋人、小中友人経験、中学部活動の順となっていた。

以上から、仮説1は部分的に支持された。社会階層による差はなかったが、ソーシャル・キャピタルは交際をうながした。なお、独立変数の初職ホワイトカラーを初職職業威信にかえても、結果は同じだった。従属変数を告白した人数、告白された人数としても、同様の結果となった(ただし中学部活動の効果はなくなった)。

つぎに仮説2「交際人数が多い人ほど、結婚しやすいだろう」を検証するために、現在既婚者かどうかを従属変数、交際人数を独立変数としたロジスティック回帰分析をおこなった(表2)。その結果、モデル1より教育が高い人ほど、結婚するチャンスが有意にふえた。

モデル2でこれに交際人数を追加したら、教育の効果はのこりつつも、交際人数が独自の有意な効果をもった。つまり、交際人数が多い人ほど、結婚しやすかった(オッズ比1.2)。交際人数を交際経験があるかどうかにかえたら、効果がより明確になった。オッズ比が10.4だったので、交際経験がない人とくらべて1人でもある人は、10倍以上結婚しやすい。交際人数を告白した人数、告白された人数にかえても、有意な正の効果をもった。初職ホワイトカラーダミーを初職職業威信にしても、また配偶者との離別者・死別者をくわえて分析しても、同じ結果をえた。したがって、仮説2は支持された。

5 まとめ

この論文では、恋愛経験を始めてランダムサンプリング調査によって計量的に測定した。その結果、恋愛の壁をこえて恋人と交際するのに社会階層は影響をもたず、恋愛はすべての人に平等にひらかれていた。それよりむしろ、同性および異性とのソーシャル・キャピタルが役だつことを明らかにした。さらに、交際人数が多ければ、とりわけ1人とでも付きあったことがあれば、結婚の壁を乗り越えるチャンスがふえた。

これらの結果は、ソーシャル・キャピタルを蓄積することが、恋愛経験や家族形成に役だつことを意味しよう。とくに、教育が高いほど結婚のチャンスがあがったが、もし教育が低くてもソーシャル・キャピタルによって補完しうることが示唆された。

これまで、恋愛が家族形成と結びついていることが指摘され(上野1994、千田2011など)、恋愛から結婚への移行が実証的に解明されはじめた(岩澤2010、三輪2010、中村・佐藤2010など)。この論文では、そうした結婚の壁の分析に、恋愛の壁の分析を接続させた。

なお、先行研究の成果と比較すると、恋愛の壁は、内閣府(2011)によれば正規雇用労働者ほどこえやすかったが、今回の調査では従業上の地位は有意な差をうまなかった。結婚の壁は、社会階層が高いほど乗り越える可能性が高いとされ(白波瀬2011、太郎丸2011など)、今回の結果と一致した。

今後の課題としては第一に、今回のデータが男性に限定されていたので、女性ではどのようなメカニズムがはたらくのかをしらべる必要があるだろう。坂口(2009)によれば、恋愛における心身の作用は、男女で異なることがあるという。

そのうえで第二に、恋愛、結婚、出産における社会的格差を、同時にデータ収集することがもめられていよう。佐藤他編(2010)は恋愛から結婚への移行と、結婚から出産への移行を分析しているが、それぞれの使用データが異なっていた。もし同時にデータ収集できれば、一貫したメカ

ニズムを描けるであろう。

【付記】

この研究は科学研究費補助金の助成を受けており、その成果の一部です（非正規雇用労働をめぐる社会的格差の調査研究 若年世代のキャリア形成に着目して、2009～11年、基盤研究C、研究代表小林盾）。小林（2011）の分析を発展させました。執筆にあたり、石田浩氏、金井雅之氏、佐藤嘉倫氏、千田有紀氏、山口一男氏、山田昌弘氏、渡邊大輔氏から貴重なアドバイスをいただきました。ここに感謝します。

【文献】

- 岩澤美帆、2010、「職縁結婚の盛衰からみる良縁追及の隘路」、佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』勁草書房。
- 小林盾、2011、「恋愛格差の実態と結婚への影響 2010年社会階層とライフスタイル調査の分析（1）」『第52回数理社会学会大会・第7回ネットワークが創発する知能研究会研究報告要旨集』。
- 三輪哲、2010、「現代日本の未婚者の群像」、佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』勁草書房。
- 内閣府、2011、『結婚・家族形成に関する調査報告書』。
- 中村真由美・佐藤博樹、2010、「なぜ恋人にめぐりあえないのか？ 経済的要因・出会いの経路・対人関係能力の側面から」、佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』勁草書房。
- 坂口菊恵、2009、『ナンパを科学する ヒトのふたつの性戦略』東京書籍。
- 佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編、2010、『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』勁草書房。
- 千田有紀、2011、『日本型近代家族 どこから来てどこへ行くのか』勁草書房。
- 白波瀬佐和子、2011、「少子化社会の階層構造 階層結合としての結婚に着目して」、石田浩・近藤博之・中尾啓子編『現代の階層社会2 階層と移動の構造』東京大学出版会。
- 谷本奈穂、2008、『恋愛の社会学 「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社。
- 太郎丸博、2011、「若年非正規雇用と結婚」、佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の階層社会1 格差と多様性』東京大学出版会。
- 都築一治、1998、「職業評定のモデルと職業威信スコア」、都築一治編『職業評価の構造と職業威信スコア』1995年SSM調査シリーズ5。
- 上野千鶴子、1994、『近代家族の成立と終焉』岩波書店。
- 山田昌弘、2010、『「婚活」現象の社会学 日本の配偶者選択のいま』東洋経済新報社。
- 山田昌弘・白河桃子、2008、『「婚活」時代』ディスカヴァー・トゥエンティワン。

表3 グループ別の平均交際人数と既婚者比率

	度数	平均交際人数	既婚者比率
年齢			
30代	152	3.63	68.4%***
40代	284	3.43	80.3%
50代	205	3.76	88.8%
教育			
中学	20	4.05	65.0%*
高校	214	3.55	75.7%
短大・高専	18	3.67	72.2%
大学	346	3.61	84.4%
大学院	43	3.28	79.1%
婚姻状態			
未婚	127	2.96**	0.0%
既婚	514	3.74	100.0%
従業上の地位			
自営	93	3.88	83.9%***
正社員	465	3.54	83.2%
派遣・契約	27	3.52	66.7%
パート	20	4.00	60.0%
無職	32	3.41	53.1%
職業			
専門	116	3.16*	81.9%***
管理	191	3.88	94.2%
事務	89	3.13	74.2%
販売	65	3.85	80.0%
熟練	62	3.45	71.0%
半熟練	35	4.80	65.7%
非熟練	22	3.59	72.7%
世帯収入			
～599万	230	3.46	67.8%***
～1199万	351	3.64	86.0%
1200万～	60	3.73	93.3%
小中友人経験			
0個	23	2.91**	65.2%
1個	55	3.02	76.4%
2個	143	3.18	76.2%
3個	264	3.68	82.6%
4個	153	4.10	83.7%
中学の部活動			
していた	542	3.69**	80.1%
それ以外	95	2.96	80.0%
恋人有無			
中学で恋人いた	153	5.01***	83.7%
それ以外	486	3.14	79.0%
高校で恋人いた	221	4.89***	85.5%*
それ以外	418	2.89	77.3%

*** 分散分析で $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$